

時制・耐続・生成（1）

——コブラを深く時制化する——

Tense, Endurance and Becoming (1) : Tensing the Copula Seriously

加 地 大 介*

Daisuke Kachi

序

実体的対象における通時的同一性と内在的変化はいかなる意味で両立可能なかを問う「内在的変化の問題(the problem of intrinsic change)」に対しては、互いに対立し合う存在論的立場からいくつかの対処方法が提示されている^①。その中で、時点指示を属性もしくはその例示に対する副詞的修飾へと転化することにその眼目を見出された結果として「副詞主義(adverbialism)」と呼ばれることの多い、ジョンストン(M. Johnston)やヴァン・インワゲン(P. van Inwagen)らの方法に対しては、同時にしばしば、コブラの時制化や例示の三項関係化など、いくつかの異なる特徴づけがなされる。また彼らの副詞主義は、「現在主義(presentism)」に対抗する「永遠主義(eternalism)」に基づいて、「延続主義(perdurantism)」に対抗する「耐続主義(endurantism)」を正当化する方法として位置づけられることも多い^②。

筆者は、彼ら（特にジョンストン）の方法の核心をコブラの時制化に見出したうえで、耐続主義を擁護するための基本的方針としてそれを支持する。しかし、彼らが内在的変化に伴う矛

盾の回避という目的に集中するあまり、コブラの時制化よりも時点指示の副詞化に強調点を置いたこと、また、（特にヴァン・インワゲンにおいて）コブラそのものの捉え方に問題があることなどが、いくつかの不十分さ・曖昧さや混乱のもととなっていると考える。さらにこの方法は、必ずしも現在主義ではないにしても、時制を存在論的に重視する「深い時制化(serious tensing)」のひとつの形として捉えられるべきであり、本来は永遠主義にむしろ対立する方向性の中に位置づけられるべきだと思われる^③。

第二部まで含めた当論文全体の目標は、「貫世界同一性(transworld identity)」の概念やテイラー(R. Taylor)の「純粹生成(pure becoming)」の概念をも援用しながら、時制主義・耐続主義・生成主義をできるだけ本源のかつ一体的に定式化し、擁護することである。そのための準備作業として、論文全体の第一部を構成する本稿では、ジョンストンらの立場を巡る上述のような諸議論について分析した後に、耐続に由来する独特のコブラ的 *de re* 様相として時制を規定する。それによってジョンストンらよりも深くコブラを時制化し、採用されるべき「深い時制主義(serious tensism)」の形を提示したうえで、それに基づく内在的変化の問題の解決法を最後に改めて確認する。

* かし・だいすけ
埼玉大学教養学部教授、哲学

まず、内在的变化の問題に対するジョンストンの対処法を、彼の論文「持続に関して何か問題があるか？」に即して確認しよう⁽⁴⁾。ジョンストンは、例えば青いトマトが赤くなるなどの内在的变化において、トマトという同一の個体がいかにして相容れない性質を持ちうるのかという「内在的变化を貫く同一性の問題(the problem of identity through intrinsic change)」と、例えば青く色塗られたボールが赤く色塗られていたかもしれないという内在的可能性において、ボールという同一の個体がいかにして異なる可能世界において相容れない性質を持ちうるのかという「様相的変様を貫く同一性の問題(the problem of identity through modal variation)」(いわゆる「貫世界同一性の問題 (the problem of trans-world identity)」)との並行性・類似性を指摘したうえで、いずれの問題も一種の擬似問題だと主張する。したがってそれらを真正な哲学的問題として捉えたうえでその対処法として提示される、(1)単称名の関係化、(2)述語の関係化、(3)限定詞の文演算子化という三つの方法のいずれをも不要な動きとして退ける。

そして、様相的変様に即した形でそれらに代わって彼が提示するのが、「様相的変様の問題の語源的(eponymous)解決」と呼ぶ方法である。彼が「語源的」と称するのは、「様相(modality)」とは本来、「物が属性に対して関係づけられる仕方(ways or modes)」に関連する概念だという点に彼が着目しているからである。例えば「サムが現実世界 w においては太っているが可能世界 v においては痩せている」ということは、「サムが、太っているという属性に対して『現実世界的に(in the actual world way)』あるいは『 w という形で(in the w way)』関係づけられているが、痩せているという属性に対しては『可能

世界) v という形で』関係づけられている」ということとして解釈される。そして往々にしてこうした様相的限定に構文論的に対応するのは「現実に(actually)」「 v 的に(v -ly)」などの「副詞(adverb)」であることを指摘する。これが、彼の立場を表す名称のひとつとしての「副詞主義」の由来である。

そのうえで、彼はこの方法をもう一方の内在的变化の問題にも適用し、「サムが時点 t^* においては太っているが時点 t においては痩せている」ということを、「サムが、太っているという属性に対して『(時点) t^* という形で』関係づけられているが、痩せているという属性に対しては『(時点) t という形で』関係づけられている」ということとして解釈する。そしてこれらの形容も、構文論的には、「現在(presently)」「 t 的に(t -ly)」という副詞に対応づけられる。こうして、変化の報告における時間的限定の典型は、「述定のコプラを修飾する副詞(adverbs which modify the copula of predication)」であることになる。そしてこのことをより哲学的に表現するならば、「変化の報告における時間的限定の機能は『例化の関係を修飾する(modify the relation of instantiation)』ことである」ということになり、また意味論的には、『 a は t 的に F するものである』が言語 L において真であるのは、 a が述語『 F するものである』を t において充足 L する(satisfy L -at- t)ときである」という形で表現できる(「 t において充足 L する」は基礎的な無定義語として位置づけられる)。

このような「充足関係あるいは例化関係の相対化(relativizing)」が先ほど挙げた「(2)述語の関係化」に対して持つ利点は、まず何よりも属性の内在性を保持できるということであるが、さらに、述語の関係化によって物における属性の例化という事象が時間の流れに依存しなくなってしまうという懸念、すなわち、本来の意味

での「物の属性の変化」というものが失われてしまうのではないかという憂慮から免れることができるということである。そして彼は、結局のところ、内在的変化や様相的変様を貫く同一性の問題があたかも真の問題であるかのように思われたのは、このように例化関係を相対化できるということを忘れてしまった結果にすぎないと結論する。すなわち、時間的および様相的限定の「語源的」由来の忘却こそが、擬似問題の発生の原因であったということである。

次に、ジョンストンと類似した発想に基づいてやはり内在的変化の問題を擬似問題として退ける、ヴァン・インワーゲンの立場を、彼の論文「時間的部分と通時的同一性」に即して確認しよう⁽⁵⁾。彼は、‘St. Pauls in 1850 was dingy.’ (‘1850年のセント・ポール寺院は汚かった。’) という文を次のように分析する：

この文において、‘in 1850’は‘was’を修飾する副詞である：いつセント・ポール寺院は汚かったのか？(When was St. Paul’s dingy?); ともあれ、1850年においてである。したがって、この文を次のような構造を持つ物として考えることは誤りである：

<u>St. Paul’s</u>	<u>in 1850</u>	<u>was</u>	<u>dingy</u>
主語	連体形容語	コブラ(繫辞)	述定形容語
主部		述部	

その構造は、むしろ次のようなものである：

<u>St. Paul’s</u>	<u>in 1850</u>	<u>was</u>	<u>dingy</u>
主語	副詞	コブラ	述定形容語
主部		述部	

‘in 1850’のような語句の副詞的機能を認知せず、それらの語句が実際に修飾している動詞の主語を修飾する形容語のようにそれらを取り扱う哲学者たちは、私が副詞貼

付(adverb-pasting)と呼ぶ誤謬を犯している。もしもすべて副詞貼付者の自由になるならば、ありとあらゆる奇妙な哲学的問題が産み出されることになるだろう。例えば、次の文について考えてみよう：

アリスは、正面から見ると際だって美しいが、横から見ると大して美しくない。

こうして観点を通じた同一性(cross-perspectival identity)の問題の萌芽が得られることになる：際だって美しい「正面から見られたアリス」と大して美しくない「横から見られたアリス」の関係は何か？

ここで内在的変化の問題に関して「副詞貼付者」に当たるのが、時間的部分(temporal parts)と呼ばれる対象によって構成される一種の時間的延長としての「延続(perdurant)」という持続概念を提案し、それに基づいて内在的変化の問題を克服しようとする「段階主義者(stage theorist)」あるいは「四次元主義者(four-dimensionalist)」と呼ばれる人たちである。ヴァン・インワーゲンは、彼らは一種の副詞として捉えられるべき時点指示表現を誤った形で捉えた結果、擬似問題を産み出してしまったと考えているのである。そして、ジョンストンにおいても、これらの段階主義者と四次元主義者にそれぞれ対応するのが、彼が不要な動きとして退けた「(1)単称名の関係化」と「(2)述語の関係化」という方法である⁽⁶⁾。したがってこの二人は、擬似問題の結果産み出された不適切な持続概念として延続という概念を退けることにより、数的に同一な三次元的対象が異なる時点に渡って存在することとしての「耐続(endurance)」という本来の持続概念を擁護するという点で共通していると言える。

2

上で示したようなジョンストンとヴァン・インワーゲンの立場に対しては、賛否いずれの側からも多くの反応が示されたが、反応した者によってかなりその性格付けが異なっている。ジョンストンが上の立場を提示した博士論文のスーパーヴァイザーでもあったルイス(D. Lewis)は、1988年の論文「粒子の再配置：ロウへの回答」の註(1)において、ルイスが批判する内在的变化の問題の第一の解決法の「副詞的変種(‘adverbial’ variant)」としてハスランガー(S. Haslanger)の方法を紹介し、それと「少なくとも可能性として」同類であると考えられる立場としてジョンストンの立場を位置づけた⁽⁷⁾。その「第一の解決法」とは、属性を時間に対する関係として再解釈する方法であり、ハスランガーの立場がその一変種であるとルイスが考えるのは、時間に対する関係性を属性そのものではなく、属性を持つという関係に組み込むからである。すなわちこの立場では、例えば「私はある時点 t において直立している」という命題は、私・時点 t ・直立という三項間での関係成立を主張する命題として解釈されるということである。

この後詳しく述べることになる観点からひとつ興味深いのは、ルイスは、同論文の続く註(2)で、彼が批判する第二の方法に対しても副詞的変種があるとして、ヒンクリフ(M. Hinchliff)の立場を紹介していることである⁽⁸⁾。第二の方法とは、真正な時点は現在しかないと考えることによって内在的变化の矛盾を回避する、いわゆる現在主義に基づく方法であるが、通常の現在主義は過去や未来の時点を「代用的時点(ersatz time)」と考えることによりそのような時点における属性と現在における非両立的な属性との所有をいずれも可能ならしめるのに対し、この立場では過去や未来における属性の所有を、

時間的に修飾された形での、現在における所有と見なすことにより、相矛盾する属性の両立を可能にするのである。

これらに対しルイスは、第一であれ第二であれ、副詞的に修飾された形での属性所有が端的な属性所有に対してどのような関係を持つのがわからないという点を問題視する。そして第一の変種も結局のところ時点への関係を含む点で一時的内在性質の所有を否定することとなり、第二の変種も現在以外の時点を認めないという点において「持続」と「変化」を否定しているため、それぞれ本質的に通常の関係主義、現在主義の問題点を克服していないと彼は断定する。

ルイスが、彼が言うところの第三の立場としての段階主義の立場からジョンストンとヴァン・インワーゲンの方法を批判したのに対し、その方法に賛成する立場から捉えたのがロンバルド(L. B. Lombard)である⁽⁹⁾。また、ルイスが「副詞的変種」という用語で時点指示を副詞化するという点を彼らの方法の特徴として強調したのに対し、ロンバルドは、属性という概念と属性を持つという概念を区別するところに二人の方法の主たる特徴があると考え、それを「例示解法(exemplification-solution)」と呼んだ⁽¹⁰⁾。彼によれば、例えば「赤さ」という属性は関係ではなく性質であるが、「例示」は関係であり、「赤さを持つ」は関係的属性である。そしてジョンストンとヴァン・インワーゲンによる解法の眼目は、属性を持つという関係を二項関係ではなく、物と属性と時点という三項の間に成立する三項関係として捉えることによって内在的变化が孕む矛盾を回避したことにあると彼は考えるのである。

しかしこのように考えると、「副詞的に修飾された形での属性所有が端的な属性所有に対してどのような関係を持つのがわからない」という先ほど示したようなルイスの批判を浴びるこ

となるが、それに対してロンバルドは次のように答えている⁽¹¹⁾：

たしかに、「例示」は時間的に相対化されており、ちょうどいかなる物もただ単に「…より背が高い」ということとはないように、いかなる物もただ単に属性を例示することとはしない。しかしある時点において何かが赤さに対してその関係を持つとき、その物がその時点において関係を持つのは端的な赤さに対してである。そしてその時点において、それはただ単に赤いのである。

そしてロンバルドは、このような「例示解法」は、いわゆる「時間的部分」を導入することなく内在的变化の問題に対処することになるので、耐続主義と永遠主義とを両立させることができるということにこの解法の長所を見出している。

ここで興味深いのは、ロンバルドが上のような論点を提示したのが、「一時的内在性質の問題に対するロウの方法」と題する論文においてであり、そのタイトルからも窺えるように、彼が「例示解法」の変種だと考えるロウ(E. J. Lowe)およびハスランガーの方法を批判するという目的のもとであったことである⁽¹²⁾。ロウは、先ほど紹介したルイスの論文に対する応答論文「内在的变化の問題：ルイスへの応答」において、ルイスがその論文の註(1)で紹介したハスランガー（およびジョンストン）の方法を擁護すると同時に、その方法が属性の所有を一種の三項関係と見なすことだと主張する先ほど示したようなルイスの解釈を不適切だとして、次のように批判した⁽¹³⁾：

形を持つ（例化する、例示する）ことが時点に関係しているということは、二項関係の成立が時点に関係しているということであって、その関係項のひとつが時点であるような三項関係が含まれているということではない。ルイスの注釈は、解法(ii)による、「tにおいて」の副詞的

（あるいは述語修飾語的(predicate modifier)）資格を正當に解釈し損なっていることを示している。…（中略）…というのも、それが実際に主張するのは、ある物が形づけられている(being shaped)ということ自体が時点に対する関係を持っているということであって、ある物が形づけられているということが、一部には、その物が時点に対して関係を持つという問題であるということではないからである。それゆえ、解法(ii)の支持者は、対象 a が時点 t においては曲がっているが時点 v においては真っ直ぐであるということの無矛盾性を説明する際に、それが主張するのは、a が曲がった形を持っているということは t において成立する一方、a が真っ直ぐな形を持っていることは v において成立するということであるとやりたいだろう。

つまりロンバルドとロウは、ジョンストンの方法を擁護して、ルイスによるその批判が妥当でないことを主張する点では共通しているのだが、ロンバルドはその方法を例示関係の三項化として解釈する点ではルイスに賛成しているのに対し、ロウはそうした解釈は『「tにおいて」の副詞的（あるいは述語修飾語的）資格を真剣に解釈し損なっている」結果だとして批判しているのである。先ほども示唆したように、ロンバルドがこの方法の呼称の中に「副詞」というキーワードをあえて入れず、「例示解法」と命名したのも、おそらくこうした相違の反映だと思われる。

そしてロンバルドとロウの相違に見られるような解釈の二義性が端的な形で現れているのが、メリックス(T. Merricks)の論文「耐続と不可識別性」においてである⁽¹⁴⁾。メリックスは、内在的性質の問題に対する解法を三種類に分類した中で、第一の解法の代表者としてヴァン・インワーゲンを挙げ、第二の解法の代表者としてハスランガーとジョンストンを挙げた。つまりヴァン・インワーゲンとジョンストンを同類と考

えたロンバルドとは対照的に、両者が異なる解法を採用しているとメリックスは解釈したのである⁽¹⁵⁾。

彼の分析による第一の解法とは、「すべての属性は実際には時点に対する関係である」と考えることによる解法であり、例えば(1)「時点 t における対象 O と時点 t における対象 O は同一である」(2)「時点 t における対象 O は曲がっている」(3)「時点 t における対象 O は真っ直ぐである」という三つの前提にライブニッツの同一者不可識別の原理を適用することによってもたらされる「時点 t における対象 O は曲がっていると同時に曲がっていない」という矛盾を、「対象 O は t に対しては『…において曲がっている』という関係を持つが、 t' に対しては『…において真っ直ぐである』という関係を持つ」と解釈することによって回避する方法である。また彼は、その方法に類似した解法として、「すべての属性は実際には時点－指標化されている(time-indexed)」と考えることによる解法も挙げている。この解法によれば、上の矛盾は、「対象 O は $<t$ において曲がっている(bent-at t)> (という属性を持つ) と同時に $<t$ において曲がっていない> (という属性を持つ)」という形で回避されることになる。

これら属性の関係化と指標化という二種類の第一の解法に対して、メリックスは第二の解法を「副詞主義」と呼び、「対象が属性を持つ方法(しかし属性そのものではない)は、時点によって修飾される」と考える立場だと解説している⁽¹⁶⁾。この立場は、先ほどの三つの前提のうち第二、第三前提をそれぞれ(2)'「 O は t 的に(in a t ly way)曲がっている」(3)'「 O は t' 的に(in a t' ly way)曲がっていない」と解釈することにより、「対象 O は $<t$ 的に(in a t ly way)曲がっている> と同時に $<t'$ 的に(in a t' ly way)曲がっていない>」という形で矛盾を回避するとされ

る。

上のようなメリックスの分類はまさしく、当該の解法の特徴をそれぞれ「(三項) 関係化」として捉えるロンバルドと「副詞化」として捉えるロウとの相違に対応すると言える。ただ、ロンバルドとロウがそれに賛成的立場から論じたのと対照的に、さらに段階主義に基づいてそれを批判したルイスとも異なり、メリックスは現在主義の立場からいずれの解法をも批判した。第一の「(三項) 関係化」による解法に関するその批判理由は、メリックスが解法に望まれる条件として掲げる七つの要件のうちの次の第一要件に反するということである⁽¹⁷⁾：

- (i) 解法は、「曲がっている」などの非・時点・指標的(non-time-indexed)かつ非関係的な属性の例示を許容するべきである。

第二の「副詞化」としての解法はこの要件を満たすと同時に、「関係化」の解法とともに次の要件も満たしている。しかし彼によれば、いずれの解法もその満たし方に問題なしとは言えない⁽¹⁸⁾：

- (ii) 解法は、対象が(例えば「曲がっている」と「曲がっていない」などの)相補的(complementary)属性を例示することがあり得るということを否定すべきである。

というのも、いずれの解法もこの要件を満たすに当たって「矛盾を引き起こすように思われるような真の変化を否定する」というコストを伴うので、それらを「無償で(for free)」避けることができるのであれば避けた方が望ましいと彼は考えるからである。そしてまさしく彼が信奉するところの「現在主義」こそがそうした無償の回避方法を提供してくれるというのが、彼の

当論文における趣旨なのである。この批判については、本稿中の後の部分で検討する。

そして、メリックスと同様に「現在主義」の観点からジョンストンとヴァン・インワーゲンの方法を批判した結果、彼らを自己に敵対する「永遠主義」の陣営に配置したのがヒンクリフである⁽¹⁹⁾。彼は、内在的属性を対象と時間の関係へと還元するメラー(D. H. Mellor)に代表されるような「関係的解法(relational solution)」の変種として彼らをハスランガー、フォーブズ(G. Forbes)とともに「関係化変種(relativization variant)」という立場として位置づけ、その中で、対象と関係化された属性(relativized preoperty)と時点との間に成立する無定義的な三項例示関係を導入することによって時点に対する例示の関係化を直接的に行うところに二人の特徴を見出した。

そのうえで彼はこれら二つの立場をクワイン、グッドマン、スマート、アームストロング、ルイスによって代表される「延続解法(perdurant solution)」とともに「直観に反する理論」だとして批判し、そのような反直観的な理論を提示させた原因として彼が考えるところを次のように述べている⁽²⁰⁾：

私が思うに、これらの反直観的な理論のいずれかを採用する人たちがそうする理由は、彼らが時間の形而上学についての共通の見解を受け入れているからである。その共通見解とは、大まかに言って、すべての時点と時間の中のすべての物が平等に実在的であるという見解である。私が「永遠主義」と呼ぶこの見解によれば、時間は空間のようなものである。…(中略)…永遠主義者にとっては、現在に関して何も特別なことはない。異なる時点における物もまったく同様に実在的である；いかなる時点も形而上学的に特別視されない。

後述するように興味深いのは、そもそもルイ

スを批判するという文脈で登場したジョンストンが、ヒンクリフの観点からは、ルイスと広い意味では同類と見なされてしまったこと、のみならずこれに続く箇所、永遠主義こそが内在的变化の問題を真正化してしまう本質的要因であるとヒンクリフが断罪していることである⁽²¹⁾。ジョンストンにしてみれば、内在的变化が単なる擬似問題であることを見抜けなかった結果として帰着する立場のひとつが現在主義であり、そうした擬似問題性を指摘することによって問題を回避するのが自身の立場であると自負しているのだから、敵の一人としての現在主義者に放った矢がそのままの形で自分に返ってきってしまったわけである。

3

上のような錯綜を知ってか知らずか、ルイスは最晩年の論文「コブラの時制化」において再び内在的变化の問題を取り上げた⁽²²⁾。そこでは、1988年の論文と異なり、ジョンストンの立場を、時間に対する関係として属性を再解釈する第一の立場の「副詞的変種」としてではなく、(少なくともジョンストンの意思としては)あくまでも内在的属性の単項性は守りながらも持続性と内在的变化を両立させるために「コブラを時制化する」立場として次のように紹介した⁽²³⁾：

ジョンストンの解法は、コブラを時制化することである：「属性の例化とは、その属性のある時点における例化である、ということが判明する」(1987, p.129)。時点に対する関係へと変わってしまうのは、「しゃがんでいる」とか「直立している」という内在的属性ではなく、この属性をそれを持つ物へと関係づけるコブラなのである。

「[属性を]持つこと」は、元来は物が属性に対して持つ二項関係だと思われていた。いまや代わってそれは、物が属性と時点に対して持つ三項関係となるであろう。もしもあなたが時点 n において「しゃがんでいる」という

属性を持っているならば、「しゃがんでいる」という属性は無傷のまま保たれている。それは今なお私たちが常に想定していたような単項的内在属性である。それは関係によっても関係的属性によっても代替されていない。

またルイスは、1988 年の論文ではジョンストンの立場を「少なくとも可能性として」ハスランガーと同類であると、曖昧さを残す形で位置づけていたが、この論文では、両者の相違をより明確化した。ハスランガーは内在的属性の単項性を保持しようとする点ではジョンストン（およびルイス）と同類であるが、単項属性は物が「端的に持つ(have *simpliciter*)」ものであるということを保持しようとする点で彼女はジョンストンと異なる（一方、ルイスとは同様である）とルイスは認定し、彼女の主張を次のように要約している⁽²⁴⁾：

いかにしてあなたは時点 t_1 においてしゃがんでいることが可能なかを説明するためには、「しゃがんでいる」という単項的内在属性に言及することが必要であるだけではない；あなたがこの属性を端的に持っているという命題にも言及する必要がある。そしてこの命題について、それが t_1 において成立すると述べることも必要なのである。ハスランガーはここで「命題」として、永久的に(once and for all)真か偽である何かではなく、ある時点では成立するが別の時点では成立しないことが可能であるような何かを意味している。

以上のようにジョンストンとハスランガーのそれぞれの立場を比較しつつ要約したうえで、やはりいずれの立場にも問題があることを示すのが 2002 年論文の主旨であり、それを彼は次のようにアブストラクトとしてまとめている⁽²⁵⁾：

耐続的对象における内在的变化の問題に対する解法は三

つの条件を満たさなければならない。それは、単項的内在属性を関係によって代替すべきではない。それは、属性を端的に持つということを属性に対して何らかの関係を持つということによって代替すべきではない（ブラッドリーの無限後退によって論駁されたように、属性を端的に持つということが必ずしも属性に対して何らかの関係を持つということを意味しないかぎり）。それは、ある時点において内在的属性を持つということの未説明な概念に依存すべきではない。ジョンストンの解法は、第二の条件を犠牲にして第一の条件を満たす。ハスランガーの解法は、第三の条件を犠牲にして第一と第二の条件を満たす。

すなわち、ジョンストンもハスランガーも結果として、例えば「ストローが曲がっている」という文における「ストロー」に「曲がっている」という性質が「端的に属している」という概念を、十分な正当化や説明を与えることなく修正的な別の概念で代替してしまっているという点を、ルイスは問題視するのである。

こうしたルイスの分析と批判を踏まえながらハスランガー自身は、『形而上学オックスフォードハンドブック』の第 11 章「時間を貫く持続」において、ジョンストンと自身の解法を永遠主義のもとで耐続主義を成立させようとする点で同類と見なすヒンクリフの特徴付けを踏襲したうえで、それをさらに三種類に分類した⁽²⁶⁾。そのうちの一種類がルイスが主張したような「コブラの時制化」なのだが、ジョンストンとハスランガーはそれとは異なる二つの種類をそれぞれ代表する者として位置づけられた。そしてジョンストンの解法に対しては、メリックスに従って「副詞主義」という、ルイスが 1988 年の論文で着目した点を再び強調する呼称を採用し、自らの解法に対しては、「事態(state of affairs)」を中心とした解法であるという意味で「ソフィズム(SOFism)」と命名した⁽²⁷⁾。そのうえでハ

スランガーは、バーワイズとエチュメンディの状況意味論に依拠しながらタイプとしての事態とトークンとしての事態という二種類の事態を導入し、ルイスが未説明だとして批判した「ある時点において内在的属性を持つ」という概念を、「タイプとしてのある事態が例化した、トークンとしての事態が、ある時点に存在する」という概念に基づいて説明した。

ハスランガーは、タイプとしての事態においては属性の無時間的例示が保持されているという理由で自己の立場を永遠主義の一種と考えており、ハスランガーを反永遠主義者として解釈したヒンクリフに抗議している⁽²⁸⁾。しかしこれに対しクルツは、ハスランガーの立場における例化を「単項タイプ例化(monadic type instantiation)」と形容したうえで、少なくともトークンがある時点において成立すると考える点で、例化の完全な無時間化には成功していないと評している⁽²⁹⁾。またロンバルドは、「＜事態が時点 *t* において成立する＞という事態そのものについても再び時点 *t* において成立するといわざるを得ず、さらに…」という形での無限後退の危険を指摘している⁽³⁰⁾。

4

以上が、ジョンストンとヴァン・インワーゲンの立場を巡る解釈の揺れの概要であるが、大まかに整理すれば、どちらかと言えば属性例示の時点相対化に力点を置く、ロンバルド、(特に2002年論文における)ルイス、ヒンクリフ(およびヴァン・インワーゲンの立場に対するメリックス)の解釈と、時点指示の副詞化に力点を置くハスランガー、ロウ(およびジョンストンの立場に対するメリックス)の解釈という二種類に分かれている。そしてヒンクリフ、メリックス、ハスランガー、ロンバルドは、現在主義に対立する永遠主義のもとで耐続主義を擁護し

ようとする立場であることを強調する点で一致している。

私自身は、ジョンストン(およびヴァン・インワーゲン)の立場をコブラの時制化として性格づけるルイスの解釈に、これから述べるように限定付きではあるが、基本的に賛成する。そして、永遠主義の一形態として彼らの立場を特徴付けることには断固として反対する⁽³¹⁾。

ジョンストンとヴァン・インワーゲンの立場を「副詞主義」と名付けたくなる第一の理由は、もともと実際に彼らが「副詞」という言葉をキーワードとして用いているからである。ジョンストン自身が自らの解法を「様相的変様の問題の語源的解決」と呼んだのは、「様相」が本来「物が属性に対して関係づけられる仕方」として「副詞」に親近性を持つものだという認識からであった。またヴァン・インワーゲンも、副詞的機能を持つ‘in 1850’のような語句を形容詞化してしまう「副詞貼付の誤謬」こそが内在的変化の問題という擬似問題を生じさせる原因だと喝破していた。

しかしジョンストンは、その際の副詞的表現をあくまでも「述定のコブラを修飾する副詞」として捉えており、「変化の報告における時間的限定の機能は『例化の関係を修飾する』ことである」ということを強調している。つまり、あくまでも中心となるのは「例化の関係」を表す「述定のコブラ」であり、時間的指示表現は、そのさらなる副詞的修飾という副次的な位置を与えられている。またヴァン・インワーゲンも、「‘in 1850’は‘was’を修飾する副詞である」という形で、やはり‘in 1850’という副詞的な時点指示表現が‘was’というコブラの限定であるという認識を示している。

ところが、ここで問題となってくるのが、「副詞」および「コブラ」という概念そのものの曖昧さである。実際、ヴァン・インワーゲンは、

註で次のように述べている⁽³²⁾：

私が学校で教えられた伝統的文法によれば、‘was’というコブラは‘St. Paul’s in 1850 was dingy’という文の「動詞」であり、‘in 1850’はそれを修飾している。しかし、より現代的な文法では、‘to be’がコブラとして機能するときは「動詞」という文法的カテゴリーではなく、…中略…むしろ「形容詞を伴って動詞を作る」カテゴリーに属すると教えるのかもしれない。…中略…この文における‘in 1850’の機能についてのもうひとつの現代の見方は次のようなものである：‘in 1850’はまったく副詞（動詞を伴ったり動詞を作ったりするもの）ではなく、「文に伴って文を作る」文法的カテゴリーの代表としての文修飾子である。…中略…本文において私は伝統的見方を前提しているが、伝統的見方の正しさは私の議論においてはまったく本質的でない。

つまりヴァン・インワーゲンは、「コブラ」を「動詞」または「(形容詞を加えて作られた) 動詞の一部」として考えている。ということは、「述語」の一部として考えているということである。するとそうしたコブラの修飾としての‘in 1850’という副詞的表現も同様に述語の一部であるということになる。もちろん、コブラと述語から成る部分を「述部」として捉えれば、コブラの修飾とは述部の修飾でもあることになる。ここで問題視しているのは、コブラに続く述語に対する副詞的修飾として時点指示を解釈することである⁽³³⁾。ヴァン・インワーゲンは、コブラに対する修飾であることを主張する点では正しいが、コブラをあくまでも数ある動詞のひとつもしくはそれらの部分と見なすことにより、この後での引用部からも明かなように、結果として後者の解釈を行ってしまうことになるのである。

そして彼が引用部分で示した三つの見方のうちのいずれが正しくても自分の議論に影響がないと述べるのは、彼がその議論において敵対者

として念頭に置いているのが、あくまでも‘in 1850’を主部の一部と考える「副詞貼付者」すなわち四次元主義者や段階主義者だからである。しかし、敵対者は他にもいる。実際、現在主義の立場からヴァン・インワーゲンとジョンストンを批判したメリックスは、いま引用したようなヴァン・インワーゲンの説明を受けて、属性を時点に対する関係としてしまう立場の代表としてヴァン・インワーゲンを挙げ、それに類似した方法として、属性を時点指標化(time-indexed)する方法もあると述べた。つまり、例えば「曲がっている」という属性は、「時点 t に対して<…において曲がっている(bent at t)>という関係を持つ」あるいは「<時点 t において曲がっている(bent-at- t)>という属性を持つ」ということと考えるのがヴァン・インワーゲンの発想もしくはそれに近いものであるというのがメリックスの解釈であるが、このように時点指示表現を述語の一部として取り込む解釈はまさしく、コブラを動詞そのものまたはその一部としてしまったヴァン・インワーゲン自身の説明が招き込んだものだと言えよう。

したがって、「対象が(例えば「曲がっている」と「曲がっていない」などの) 相補的属性を例示する」ことを許容してしまうというメリックスの批判は、少なくともヴァン・インワーゲンが解釈したような意味での副詞に基づく「副詞主義」に対しては正当なものである。その解法の眼目が実際に時点指示の述語への取り込みにあるのであれば、それは、「曲がっている」「曲がっていない」という本来の属性を「 t 的に曲がっている」「 t^* 的に曲がっていない」という恣意的な属性へと転化することによって、「変化」を構成する相補的属性間において成立すべき矛盾的關係を蔑ろにしてしまうような解法であることになるからである。

副詞解釈に関するこのようなヴァン・インワ

ーゲンの不適切さは、皮肉にも、彼が陥ったひとつの困惑の源泉を明らかにしてくれる。というのもヴァン・インワーゲンは、「なぜ哲学者たちは通時的同一性の問題というものがあると考え続けているのか？」という問いに対して副詞貼付こそがその元凶であるという答えを与えたうえで、「はるかにもっと面白い未回答の問題」として次のような問いを掲げているからである⁽³⁴⁾：

時間についてのどのような特別さによって、哲学者たちは時間的な副詞貼付に向かう傾向性を持っていながら他の種類の副詞を貼付する傾向性をまったく持っていないということが出来るのだろうか？なぜ通・観点的(cross-perspectival)同一性や通・評価的(cross-evaluational)同一性の問題は存在しないのだろうか？

この叙述から、ヴァン・インワーゲンが例えば「ある時点 t においては曲がっているが別の時点 u においては真っ直ぐだ」という内在的变化を「正面から見れば美しいが、横から見れば普通だ」とか「ヒュームの観点では正しいが、ロックの観点では誤りだ」などと同類の事柄として捉えており、結果として、先ほど指摘したような意味で単なる述語への副詞的修飾として彼が時点指示を捉えてしまっていることは明らかである。確かに、内在的变化の問題が、ヴァン・インワーゲンが考える意味での副詞貼付の問題にすぎないとすれば、その問題は彼の言うとおり、擬似問題であることを認めざるをえないだろう。しかしヴァン・インワーゲンにとっての難点は、そうした副詞貼付の誤りというものが、哲学者たちがその擬似問題に囚われてしまう理由としてはあまりにも単純かつ些細すぎるということ、したがって彼の分析に説得力がないということである。結局のところ彼が求める「時間についての特別さ」は、時点指示を単

なる動詞の修飾もしくはその一部とすることによって彼自らが放棄してしまっていたのであり、時点指示の「副詞化」という点を解法の中心に据えることの弊害がここに端的に現れていると言えよう。これに対しコブラを中心とする見方では、コブラという文形式の中核を成す部分で時間が関与せざるを得ないということによって「時間についての特別さ」を自ずから示してくれるのである。

また一方、物と属性と時点という三項の間に成立する三項関係として例示関係を捉える、ロンバルドが呼ぶところの「例示解法」としてジョンストンらの方法を解釈することにも問題がある。ただこの点についても、その責任の一端はジョンストン自身にある。というのも、ここまで何度か引用しているように彼自身が、「述定のコブラを修飾する」という表現を「例化の関係を修飾する」という表現で言い換えているからである。

しかしまず第一に、ルイスが指摘したように、例示を純然たる関係の一種として捉える限り、いわゆる「ブラッドリーの無限後退」の問題を免れない。やはりコブラとは、実体的対象と属性のいわゆる「非関係的連結(non-relational tie)」を表す表現として、関係表現には還元不可能な独特の文法的カテゴリーに属するものと見なされるべきだと思われる。コブラの意味するところを「関係」という一種の対象として物象化してしまうと、実体的対象と属性が分断され、もはや属性が「内在する」とは言えなくなってしまうからである。

もちろんロンバルドの言うように、内在的問題を解決するという目的のためだけであれば、例示を関係化しても問題はないかもしれない。しかし本論文全体が目指しているのは、耐続や生成の本質と本源的に連結した形での「より良い解決」を行うことであり、実際そのためには、

後述するような形で例示をコブラによって表される非関係的な何かとして解釈することが不可欠なのである⁽³⁵⁾。また、コブラを述定動詞に同化してしまったヴァン・インワーゲンとは異なる形ではあれ、ジョンストンもやはり、コブラというものの独自性を見落としていたがゆえに、それを関係表現の一種へと還元できるかのような印象を与える不用意な説明をしてしまったと考えられる。

そして何よりも問題なのは、ロンバルドの解釈は、自身が立脚する永遠主義という立場を耐続主義と両立させるという、ロンバルドの個人的目的のために都合良く整形されて提示されたものだということである。ロンバルドは持続に関しては耐続主義を支持するのであるが、時間的部分を持つ対象としてのできごとの存在を確保したいという動機のもとで、永遠主義を採りながら（つまり、メリックスのような現在主義的ではない方法で）時間的部分に訴えずに持続と変化を両立させるために、時間的部分に基づく方法とは異なる方法としてジョンストンとヴァン・インワーゲンの立場を利用したのである。この点については、ロンバルドとは異なる形ではあれ永遠主義者を自認するハスランガーも、彼らの立場を自らに引きつけて解釈していると考えられる。

こうした動機の不純さは、現在主義という自身の立場から、やはり永遠主義と耐続主義を両立させる方法としてジョンストンらの解法を解釈するヒンクリフやメリックスにも当てはまる。ロンバルドとは対照的に彼らはむしろ、耐続主義を成立させるために自らが採用する現在主義的方法とは異なる解法だという理由で、それを自らの敵の一種としての永遠主義のもとに納めているからである。そしてたしかに、実体的対象と属性と時点との三項関係として例示を捉えるという図式は、時点の対象化によって結果と

してすべての時点の平等性を帰結しやすいため、永遠主義との親和性が高いのである。

しかしジョンストンやヴァン・インワーゲンが、永遠主義を自らの解法の少なくとも「主たる」動機としているとは非常に考えにくい。まず第一に、彼らの議論は何よりも、通常の実体的対象をも時間的部分から成る延続の対象と見なそうとするルイスを批判するという文脈の中で提示されたものであり、そしてルイスのそうした主張は、時間を空間と同類視するという点で、時点間における時制的相違をまったく顧慮しない永遠主義の端的な表れだと考えられる。これに対してヴァン・インワーゲンは、「時間的部分」なる概念の理解不可能性や時間と空間の非対称性を再三強調している⁽³⁶⁾。またジョンストンも、自らの立場の長所として「物における属性の例化という事象が時間の流れに依存しなくなってしまうという懸念、すなわち、本来の意味での『物の属性の変化』というものが失われてしまうのではないかという憂慮から免れることができる」という点を挙げており、このように、「時間の流れ」を尊重するという態度は、永遠主義の対極に位置するものである⁽³⁷⁾。そしてこうした事情は、ルイスが1988年の論文で、ヒンクリフとジョンストンらとの間に共通性を見出してヒンクリフの立場を現在主義の副詞的変種と形容していることによっても裏打ちされる。

また第二に、永遠主義対現在主義という対立図式自体が、いわゆる「不適切な二分法の誤謬」を犯していると思われる。すべての時点を平等視する永遠主義と現在時点のみの存在を主張する現在主義とは、たしかに対立する立場ではあるが、両者は一方の否定が他方の採用となるような、相補的關係にあるというよりは、むしろ互いに対立し合う方向性の両極に位置する対極的關係にあると見るべきである。永遠主義の否

定は、すべての時点を平等視はしないという立場であり、それを肯定形で表現すれば、過去現在未来という時制的区別を存在論的相違として尊重する立場としての「時制主義」である。現在主義とは、時制主義の中にあくまでもひとつの形にすぎない。もちろん、時制を重視することは半ば必然的に何らかの意味での現在の特権性を主張することにつながっていくので、そのような特権性を主張する広い意味での現在主義にはなるかもしれない。しかし、ヒンクリフ、メリックス、ツィーマーマン (D. Zimmerman) らに代表されるような現在標準的だと言える現在主義は、現在以外の存在を一切認めないという、最も強硬な意味での現在主義だと思われる⁽³⁸⁾。

もちろん、クルツも指摘するとおり、耐続主義対延続主義という持続に関する形而上学と時制主義対永遠主義という時間に関する形而上学とは、さしあたり別の主題であり、原理的には耐続主義と永遠主義の組み合わせや時制主義と延続主義の組み合わせもあり得る⁽³⁹⁾。しかしその理由は、後述するように、それぞれの主義は深くも浅くも規定し得るし、その深さ浅さにも多様な形があり得るという事情によるのであり、例えば、非常に浅く規定された耐続主義であれば通常の永遠主義と両立可能であるだろうし（ロンバルドの立場はこのような一例と考え得る）、逆に、永遠主義者であるための条件を緩めることによって同時に何らかの意味での耐続主義者でもあり得るだろう（ハスランガーの立場はこのような一例と考え得る）。また、時制主義の定義次第では、そのもとで延続主義を成立させることもできるだろう⁽⁴⁰⁾。

しかし重要なのは、どのような立場の組み合わせが単に「可能」であるのかということではなく、より自然で「望ましい」のかということである。そのような観点で考えたとき、本来的

な形での深い耐続主義は自ずから本来的な形で深い時制主義を導き、その逆も真であると言える⁽⁴¹⁾。そして、耐続主義であれ、時制主義であれ、それらを真剣に主張すればいずれも自ずから深いものとなっていく。その結果として、深いレベルで両者の連携性が示されたとすれば、それぞれの立場の正当性・整合性・合理性を訴えるうえで望ましいこと以外の何ものでもないだろう。本稿に続く第二部の目的は、R.テイラーが提示した「純粹生成」の概念をひとつの手がかりとしながら、深い意味での時制主義・耐続主義・生成主義のそうした三位一体性を主張することである。そのための準備作業として、本稿の残りの部分では、深い時制主義が満たすべき要件を明示したうえで、そのような要件を満たすコブラの時制化を規定することを試みる。その後、それに基づいた内在的変化の問題の解決法の特質について再確認を行うことによって、この第一部を終えることとする。

5

私は、「深い時制主義」が採用すべき「深い時制化」の要件として、次の三つを課したい：

- (1) 時制の(存在論的) 還元不可能性
- (2) 現在の(何らかの) 存在論的特権性
- (3) 過去と未来の形而上学的に本来的な(必然的、ア・プリオリな) 非対称性

(1)についてはクルツも深い時制化の定義として類似の主張をしているが、彼女の場合はあくまでも命題における時制的述定の還元不可能性という命題論的主張である。本稿ではそれも含まれるが、そのことをむしろ時制の存在論的な還元不可能性からの帰結と見なす点で、時間の形而上学に関する主張に力点を置いて述べられている。また(2)の条件によって、この時制主義

は、少なくとも弱い意味では現在主義の一種、いわば「不純な(impure)現在主義」とも言えるかもしれない。しかし先ほど述べたように、(2)は必ずしも目下標準的な現在主義としての「純粋な現在主義」が主張するような現在の絶対性や唯一実在性を意味しない(結果としてこれらを主張することになるかもしれないが)⁽⁴²⁾。その点では要件(2)に託された時制化の志の水準は標準的な現在主義における時制化に比べて低いのであるが、その分を補うのが(3)である。標準的な現在主義は、永遠主義に対して、過去と未来の存在身分に関しては、いずれも存在しないと見なすかいずれも存在すると見なすかという対極に位置するとはいえ、少なくとも過去と未来の相違を重視しないという共通性を持っている。その点では、現在主義は時制にとって重要であるはずの一側面に目を瞑るという「浅さ」を抱えている。もちろんこれに関しては、例えば未来に関する非決定性やエントロピーの増大性などによって何らかの非対称性を導入することは可能であろう。しかしこれらはあくまでも偶然的に成立する非対称性でしかなく、例えば決定論やエントロピーの減少可能性などが成立すれば直ちに消失するような非対称性である。これに対して私自身は、過去と未来の存在論的性格そのものに組み込まれているような非対称性を求めたい。すなわち、一種の形而上学的必然性として成立するような非対称性だということである。

そのような非対称性を組み込んだ時制の性格付けとして私が最も有望視するのがコブラの時制化なのであるが、残念ながらルイスが提示したような意味での「コブラの時制化」はこれら三条件のいずれも満たしていない。ルイスが想定している「時制化」とは単に「時点相対化」ということでしかなく、これでは何らかの意味での「時間化」とは言えても深い意味での時制

化とはとうてい言えない。またその点は、ジョンストンに対しても当てはまる。だからこそ彼は、コブラを「例化の関係」として容易に物象化し得るかのような表現をしてしまったのである。これに対して私は、コブラを一種の *de re* 的様相を表す表現として捉えることによって、そうした物象化を回避した形での深い時制化を実現したい。すなわち、ある実体的対象において何らかの属性が例示される際の一種の「モード」としてのコブラ的 *de re* 様相を表す表現として時制表現を位置づけるのである⁽⁴³⁾。さらにこの際重要なのは、「実体的対象」の本質的要因のひとつとして「耐続性」が含まれているということである。ここで想定されている属性の例示のモードとは、あくまでも属性例示における時間的側面に関するモードであり、実体的対象において成立している持続性としての耐続に関する還元不可能な独特のモードなのである⁽⁴⁴⁾。

このように耐続に関するコブラ的 *de re* 様相として時制を捉えたと、耐続者(endurant)としての実体的対象に属性を帰属させる各時制的命題は次のように性格づけられる：

- (a)過去命題：耐続者のこれまでの持続としての必然的持続における属性例化について主張する。
…過去のある時点における属性トロープ（あるいはその欠如）が真理値付与者(truth-value conferer)⁽⁴⁵⁾
- (b)現在命題：耐続者の目下の持続としての現実的持続における属性例化について主張する。
…現在における属性トロープ（あるいはその欠如）が真理値付与者
- (c)未来命題：耐続者のこれからの持続としての可能的持続における属性例化について主張する。
…未来における属性例化についての現在にお

ける決定性（決定していれば）が真理値付与者

これらの時制命題について、深い時制化の三要件に照らし合わせながら解説しよう。まず第一に、これらの各規定はあくまでも時制の「性格付け」であって「還元」しているのではない。それらは、時制の還元不可能性を全面的に承認したうえで、その実在性を、独特の時間的 *de re* 様相として耐続者の様相的あり方の中に位置づけるものである。つまり、時制の実在性を、少なくとも第一次的には、「時間」とか「世界」などのどちらかと言えば抽象的・全体的レベルではなく、個々の耐続者という具象的・局所的レベルに見出すところにその特徴がある⁽⁴⁶⁾。言い換えれば、時制の実在性と耐続者の実在性を一心同体のものとして捉えることにより、耐続者における *de re* 様相の持つ実在性として、時制の形而上学的実在性を主張するということである⁽⁴⁷⁾。

そして第二に、現在の特権性は、時間的文脈における意味では現在のみが「現実的」であるという点によって辛うじて確保されている。言い換えれば、「現実的」よりも包括的な意味で「実在性」を想定し、その実在性のモードとしては現実性以外にも必然性、可能性を承認したうえで、少なくとも「アクチュアル」であるという何らかの意味での活動性、現場性が持つ優位性の中に現在の特権性を見出そうとするものである⁽⁴⁸⁾。そして第三に、過去と未来の非対称性は、必然性と可能性との様相的非対称性として、*de re* 様相としての時制の存在性格の中核に埋め込まれているものとして規定されることになる。

これらの様相的性格（特に過去命題における必然性）の詳細な内実については、本論文第二部における、純粋生成を手がかりとした耐続の解明を待つて改めてより詳細に解説することに

なるが、特に未来命題についてはここでも必要最小限の注釈を行っておきたい。この場合の未来命題における「可能性」とは、あくまでも耐続のモードとしての可能性であるので、例えば因果的非決定性による分岐的な可能性などとはまったく別物である。したがってそれは、決定論の成立によって未来が直線的に描かれようが、その非成立によって分岐的に描かれようが、それとは無関係に耐続者のこれからの持続がもたらすことになる直線性のもとで成立する可能性だと言える。この点では、この場合の直線性は、いわゆるオッカム型の未来時制における「仮の未来(*prima facie future*)」としての直線性に近いものとも考えられる⁽⁴⁹⁾。

そして命題自体は、そうした可能的未来における特定の時点における属性例化を主張しているのであるが、それがあくまでも可能的なものにすぎないがゆえに、現在においては、過去命題や現在命題のように真理値付与者として対応する属性トロープ（もしくはその欠如）を持ち得ない⁽⁵⁰⁾。その結果、未来命題は直接的には真理値付与者を持たないことになるので、本来的には未来命題はその発話時点では真理値を持たない。しかし仮に当該の属性が当該の未来時点において例化する（あるいはしない）ことが現在において決定しているのであれば、未来における可能的持続がどのような形で実現していくかを顧慮する必要がないので、そのような現在における決定性を間接的な真理値付与者として割り当てることができる。すなわち、当該の対象のみならず、それを取り囲む現在の状況全般や法則的決定性すべてを含んだ何ものかが真理値付与者となるのである。したがって、もしも決定論が成立しているとすれば、結果として未来命題の二値性も成立することになるが、その場合も、真理値付与者が過去命題や未来命題の場合とまったく存在性格を異にするものである

という根本的非対称性が残る。別の角度から言い換えれば、そもそも因果的な意味での決定性に関わりを持つのはあくまでも可能的な持続上のできごとや状態のみであるという点で、因果的な意味での可能性は耐続のモードとしての可能性を前提しているということである。その意味で、後者は前者に先立つ、より根源的な可能性である。やはり、因果が時間に依存するのであってその逆ではないのである。

また、ジョンストンが提案した「コブラの副詞的修飾」としての時点指示という観点についても、若干の説明を行っておこう。コブラを主語でも述語でもない独特のカテゴリーの表現として捉えたうえでそれに対する副詞的修飾を設定するということは、主述文を「S-(tense, t)・P」という形式のものとして捉えるということである⁽⁵¹⁾。つまり、主語としての「S」と述語としての「P」とが、一種の指標としての時点指定を伴う時制としての「(tense, t)」というコブラによって結びつけていることになる。この図式が、段階や時間的部分を主語と見なす「(S, t)・P」や「(S, t)-tense-P」とも、時点指示を述語の修飾と見なす「S-(P, t)」や「S-tense-(P, t)」とも異なっているところにその特徴がある。

そしてこのように捉えたとき、「コブラの修飾」という表現は、やや不適切とも考えられる。というのも、「修飾」というと、それはあってもなくても良いような付加的なものというニュアンスがどうしても加わってしまうが、むしろ、時制とは、ときには暗黙的であれ、本来は常に時点的限定を伴うものであり、そうした時制と限定を一体にしたものがコブラとなっていると考える方が理に適っているからである⁽⁵²⁾。この考え方のもとでは、ちょうど無時間的コブラによる命題が各時制（過去・現在・未来）命題の選言として時制に中立的な命題と見なされ得るのと同様、修飾を伴わない過去形・未来形コ

ブラによる命題は、特定の時点指示を暗黙に伴っていないのであれば、特定の時点指示を伴う複数の命題から成る選言的命題として、時点指示に中立的な過去時制・未来時制命題とそれぞれ見なされることとなる。

したがって、現在時制については、原則的に時点指定は不要であるが、過去時制と未来時制については、過去現在未来を貫いて全順序化され得るような何らかの指標による時点指定を伴うものとして、おそらく原則的には無限に個別化されることとなる。これはちょうど、モードとしての時制と属性としての色という相違こそあれ、例えば、被決定者(determinable)としての一定の幅を持った赤と、決定者(determinate)としての特定の波長を持つ赤とを区別し得るという事情と似ている⁽⁵³⁾。こうしたコブラにおける指標的修飾の存在論的意味合いについては、第二部においてやはり純粹生成や貫世界同一性を手がかりとして詳細に説明されることになるが、これについても最低限の確認はしておきたい。

このような指標は、時点指定に対応する何ものかであり、耐続に伴う直線性に沿った形で全順序化され得る一種の集合要素として、量化され得る何ものかであることになる。しかしその場合も、本来的にはあくまでもコブラの一部としての指標に対する量化であるという点で、少なくとも直接的には何らかの物象的な存在論的コミットメントを伴うものではない。その意味で、どちらかと言えば唯名的な量化である。また仮に結果として何らかの物象的な存在論的コミットメントが発生するとしても、少なくとも、第一次的には過去形・現在形・未来形というモードとしての相違が基底に存在するので、発生するのはそうした相違を反映するようなコミットメントとなるということが重要である。

では最後に、以上のような形で精密化された時制の規定のもとで内在的変化の問題はどのように処理されるのかを改めて確認しておこう。この解法の長所は何よりも、時点指示の役割をコブラに果たさせることにより、持続者や属性の多元化を避けることができるということである。ロウも主張するとおり、この方法は「変化を貫く持続についての私たちの常識的語り方に関して、明らかに最も修正的度合いが少ない」のである⁽⁵⁴⁾。その結果、属性を関係化したり、持続者の時間的部分・段階などによって多様化された属性を導入したりせずに済ますことができる。また、(純粹な) 現在主義のように、現在以外の時点の存在を否定することによって持続者の持続や変化そのものを脅かすこともない。これらの要因が、ジョンストンらをして内在的変化の問題を「擬似問題」と言わしめることを可能にしたのである。

より具体的に見てみると、この解法は先にも述べたとおり、第二の要件についてはその満たし方に対するメリックスの批判こそあれ、メリックスが示した次の二つの要件を満たす：

- (i) 解法は、「曲がっている」などの非・時点・指標的(non-time-indexed)かつ非関係的な属性の例示を許容するべきである。
- (ii) 解法は、対象が(例えば「曲がっている」と「曲がっていない」などの) 相補的(complementary)属性を例示することがあり得るということを否定すべきである。

これら二つに加えて、メリックスが課した他の五つの要件のうち次の二つについても、本稿におけるコブラの時制化が深い時制化のひとつの形であり、そして深い時制化を行えばこれら

も回避できるとメリックス自身が考えているので、基本的にはそれらも満たすことになる⁽⁵⁵⁾。

- (iii) この問題の解法は、ある時点においてある形で属性を例示し、別の時点においてはその属性を同じ形で例示しないときに見出されるような、真の変化の余地を残すべきである。
- (iv) この問題に対するいかなる解法も、もしもそれが「t 的に F である(being-dy F)」や「ある時点において F である (being F at a time)」のような属性を利用するならば、端的に「F である」(being F simpliciter)のような通常の属性によってこれらの属性を分析するべきである。

そしてこれこそが、ジョンストンの解法を超えて本稿におけるコブラの深い時制化が有する長所のひとつであると言えるのだが、いくつかの留保が必要である。まず後者の要件(iv)に関しては、ルイスも「属性を端的に持つということによって代替すべきではない」という理由でジョンストンを批判していた。メリックスは、例化の代替そのものについては拒否せず、代替した場合の「分析」を要請するに留めている点では、ルイスよりも穏健だと言える。しかしこの場合重要なのは、持続的对象が「属性を端的に持つ」いうことがそもそもいかなる意味なのか、そしていかなる理由でそれが保持されたり、分析のための基礎項目とされたりしなければならないのか、ということである。ロウも主張するとおり、それが属性を「無時間的に」持つという意味であるならば、少なくとも深い時制主義者であれば、それを保持するどころかむしろ積極的に拒絶すべきものであることになる⁽⁵⁶⁾。

一方メリックスは、それを「現在」持つということとして解釈することになるのだが、まずその解釈の妥当性自体が、彼自身の現在主義と

いう立場の妥当性に依存している。また、端的でない例化を端的な例化によって「分析」すべきであるという彼の主張も現在主義に依存する部分が大きいと考えざるを得ず、同様にその主張の妥当性についての検討が必要だろう。そしてこの点については、「無償」で要件(ii)を満たす点でジョンストンの方法よりも現在主義に基づく方法が望ましいとするメリックスの主張の妥当性についても当てはまるだろう。

これらのメリックスの主張に対する本稿の回答は、時制主義的主張のひとつの形としてまさしく、持続的対象における内在的性質の例示に関しては一種の「裸の例示」や「無時間的な例示」としての端的な例示は存在せず、内在的性質は常に時制的なモードのもとで例示されるということである。するとその中でも「現実的例示」としての現在時制の例化がおそらく何らかの中心性や優位性を持つことは自然であろうが、その場合も、過去時制や未来時制の例示が現在時制の例示によって必ずしも「分析」されるべきだとは考えない。過去時制や未来時制がそもそも還元不可能な何かである以上、そこで必要とされるのは現在時制による分析ではなく現在時制との何らかの「関係づけ」であろう。この関係づけについても第二部でより詳細に検討する。

一方、要件(iii)についても、ある時点においてある属性の現在形によって例示され、別の時点においてはその属性が現在形によっては例示されないということが成立し得るので、そのような意味での「真の変化」は確保されている。しかし、先に述べたとおり、原則としてすべてのコブラには時点指示に対応する指標が少なくとも暗黙的に伴っていると考え、ある時点における例示と別の時点における例示が「同じ形」であるということそのものが厳密にはあり得ないことになる。これに対し、現在主義では、

常に例示は端的に現在における例示でしかあり得ないので、常に例示の「同じ形」が保持されることになる。しかし、現在主義の場合も、それが厳密な意味で同一の例示なのだとしたら、たちまち矛盾を抱えざるを得ない。そうではなく「異なる時点における」現在だからこそ、相反する属性がそうした現在形のもとで両立するのである⁽⁵⁷⁾。本稿では、そうした「異なる時点における」という要素をコブラにおいて実現しているにすぎない。逆に、現在時点しか存在しないと主張する現在主義者は、そうした異なる時点の存在と自己の主張との両立可能性に関する説明責任を負うことになるだろう。

そして、この要件(iii)が求めるものが結局のところ何らかの意味での「真の変化」なのであるとすれば、それがここでメリックスが考えているような「同じ形」の例示における相補的属性の成立可能性という形でなされなければならないということはないだろう。それとは別あるいはそれ以上の意味での「真の」変化が確保されればよいはずである。そして実際、コブラの様相的時制化による解法は、まず第一に、それに対応する空間的コブラは存在しないという点において、属性例示というきわめて基本的・形式的レベルで空間との非対称性を成立させるという特長を持っている。つまり、時間的「部分化」による対象の多元化や「関係化」による属性の多元化のような、時間と空間に中立的で対象や属性に個別的に適用される解法よりも、時間の根源的独自性を保っている。

さらに、属性を例示する対象でも例示される属性でもなく、例示のモードそのものが日々新たなものとなっているという意味での変化は、「真の変化」の名に十分値する根源的な変化であろう。実際、E. ソーザは、本稿で示されたようなコブラの時制化に対応する「時制的例示説(tensed-exemplification view)」を、「時間的生

成の存在論的身分は何か？」という問いに対するひとつのあり得る答えとして提示している⁽⁵⁸⁾。つまり、本稿で示されたような例示そのものの変化は、あらゆる変化の基礎としての「生成」に対応するような変化であるかもしれないのである。ソーザ自身は、生成に関するこの見解が「例示の時間的形式の過剰（相異なる時点 t に対する相異なる形式の例示：そのときごとの例示(then-exemplification)）」をもたらしてしまうとして批判し、自らは生成に関して異なる立場を採った⁽⁵⁹⁾。

しかし彼は一方で、「こうした見解における過剰さはとにかく正しいのであり、実在の真なる反映であると論ずることも可能であろう」とも述べている⁽⁶⁰⁾。もちろん彼自身はそう論ずることに否定的なのであるが、そう論ずることが可能であるばかりでなく、積極的にそう論ずるべきである、というのが本稿の立場なのである。実際、先ほど主張したように、時点指示をコブラに委ねることの最大の利点は持続に関する常識的語り方に対する修正度合いの少なさにあり、その利点は、仮にソーザが指摘する例示形式の過剰という修正によって一定程度減ぜられなければならないかとしても、十分に余りあるものである。またそうした過剰についても、それが時点指示によってもたらされるものとしたら、少なくともその時間的過剰さを雑多な実体的対象や属性に関連づけるよりは、耐続のモードとして本来的に時間に関わる時制に関連づけることの方がはるかに自然であろう。これらの主張に関しても、第二部においてより詳細にその正当化が試みられることとなるだろう。

【註】

- (1) 本稿における「実体的対象」という語は、それが表すものとして物体以外にも人物や心なども含み得るという意味で「物体」（および「実体」）よりも包

括的な用語として意図されている。この語は、本稿における考察を経て結果的には「耐続者(endurant)」という語によって代替されることになる。また、「内在的变化の問題」は「一時的内在性質の問題(the problem of temporary intrinsics)」と呼ばれることもある。

- (2) [Hinchliff 1996], [Haslanger 2003], [Lombard 2003]など。
- (3) クルツ(R. K. Kurz)は、命題における時制的述定を無時間的述定に還元可能と考えるか否かという述定形式に関する基準によって深い時制主義者と浅い時制主義者(surface tensor)を対立させる一方、すべての時点が存在すると考えるか否かという存在論的区別によって永遠主義者と現在主義者を対立させている ([Kurz, 2006] pp. 18-20.)。これに対し本稿では、後述する理由により、時制的相違を存在論的に重視するか否かという観点によって時制主義者と永遠主義者（反時制主義者）を対立させたうえで、さらに時制をどのように存在論的に性格づけるかによって浅深の相違を見出すという、もっぱら存在論的な観点に基づく手順を採る。時制化に関しては、ハスランガー(S. Haslanger)も意味論的観点に加えて存在論的観点からの分類を行っている ([Haslanger 2003] p.340.)。
- (4) [Johnston 1987]
- (5) [van Inwagen 2000] . 他に[van Inwagen 1990].
- (6) なお、(3)の「限定詞の文演算子化」は、現在主義に基づく対処法に対応する。
- (7) [Lewis 1988] p.65f.
- (8) *Ibid.*, p.66.
- (9) [Lombard 2003]
- (10) とはいえ、先に示したように、ルイスもロンバルドと同様の三項関係としての性格付けも同時に行っている。なお本稿では、個体としての実体的対象と普遍としての属性との連結を表す‘exemplification’を「例示」と訳し、個体としての実体的対象やトロープと普遍としての実体的普遍（いわゆる第二実体）や属性との連結を表す‘instantiation’の訳語である「例化」と区別する（引用部分については、各原語を機械的にそれぞれ各訳語に対応させているだけなので、原著者の意図は必ずしも反映されていない）。また例示は、トロープ(trope)の実体的対象への「内属(inherence)」と普遍属性からの例化とによって分析可能であるので、例示という表現を用いても必ずしも「事態(state of affairs)」の存在にコミットするわけではない。
- (11) *Ibid.*, p.171.

- (12) ちなみに‘Lowe Road’とは、「下劣な手法」という意味を持つ‘Low Road’という語の振りである。
- (13) [Lowe 1988] p.75. ただし、ロウも「副詞的」という語を「述語修飾語的」と言い換えている点において、後述するような問題を完全に免れているわけではないように思われる。
- (14) [Merricks 1994]
- (15) ただし、ヴァン・インワゲンが「副詞貼付の誤り」という用語を用いて副詞主義的主張を明確にしたのは[van Inwagen 2002]においてなので、メリックスのように解釈されても致し方ない面もある。
- (16) ジョンストンの立場を「副詞主義」と呼んだのは、おそらくメリックスが最初である。
- (17) *Ibid.*, p.168.
- (18) *Ibid.*, p.169
- (19) [Hinchliff 1996]
- (20) *Ibid.*, p.122.
- (21) *Loc. cit.*
- (22) [Lewis 2002] なお、上で採り上げたロンバルドの論文は、このルイス論文よりも後出(2003年)である。
- (23) *Ibid.*, p.4f.
- (24) *Ibid.*, p.11.
- (25) *Ibid.*, p.1.
- (26) [Haslanger 2003] pp.341-343.
- (27) つまり、‘StateOf aFairs’からの‘SOF’にもとづく「ソフィズム」である。自己の立場に対する命名としてはずいぶん自虐的である。ちなみに、ロウも同類ということにされているが、彼自身は「事態」という存在者を認めることにもともと懐疑的であるし、特に最近ではより現在主義的な立場にシフトしているので、「ソフィスト」と呼ばれては良い迷惑であろう。
- (28) [Haslanger 2003] p.343, n30.
- (29) [Kurz 2006] p.23.
- (30) [Lombard 2003] pp.174-180.
- (31) ただし、二人の立場に結果として永遠主義的側面がまったく伴っていないとも言切れないので、「解釈」というよりは、どちらかと言えば「再構成」に近い。以下で提示されるのは、私自身が最も適切と考える形に二人の立場を変容させたものである。
- (32) [van Inwagen 2000] p.40f., n4.
- (33) 私見では、時点指示を文修飾子として解釈する考え方も、コブラに対してではなく述語に対しての修飾として時点指示を解釈する考え方に近い。というのも、後述するように時点指示はコブラとしての時制と一体のものであるとすれば、時点指示を文修飾子として文頭に抜き出すということは、コブラなき文

の存在を承認するか、もしくは元のコブラを別のコブラで置き換えることになってしまうからである。文全体の修飾として後から加わる何かとして時制やそれに伴う時点指示を捉えることは、文そのものには必ずしも不可欠とはいえない何かとしてそれらを位置づけることであるという点で、述語の単なる修飾部分として時点指示表現を捉える発想に近いと言えるだろう。この点については、[加地 2005] (特に pp.5-8) も参照されたい。

- (34) [van Inwagen 2002] p.410.
- (35) 耐続の説明と密接に結びついた形での「より良い解決」の必要性は、メリックスも強調するところである ([Merricks 1994] p.182f.)。
- (36) [van Inwagen 1990] (参考文献 p.120), [van Inwagen 2002] p.390f. など。
- (37) [Johnston 1987] p.128f. ただし、彼は特殊相対性理論との親和性という点では時間と空間を並行的に扱う動機があることを認めている (*Ibid.*, p.195)。しかしこの論点は、後述するように、本稿における時制の性格付けにとっては必ずしも不利とならない。
- (38) 現在流布している永遠主義対現在主義という対立図式は、すべての時点の平等性を「存在するか否か」という点のみに関する平等性に最初から限定してしまうことによって、時制の実在性の問題を過去現在未来における時点存在の問題に還元してしまっているところにも問題がある。これは、クワインの存在論的コミットメントの基準の偏重という現在の分析形而上学における弊害のひとつの現れだと思われる。本稿のひとつの特徴は、述定における時制の還元不可能性と直結するような形で時制の実在性を主張するところにある。
- (39) [Kurz 2006] pp.18-20. ただし、上記の註(3)も参照のこと。
- (40) 極端な場合、耐続主義と延続主義でさえ両立させることが可能であるかもしれない。この点については、次を参照されたい：[McCall and Lowe 2006]
- (41) 同趣旨の主張が次でなされている：[Carter and Hestevold 1994], [Lowe 2009]. なお、クルツは深い時制化と永遠主義の両立可能性を主張しているが、註(3)で述べたとおり、彼女の時制化はあくまでも述定形式に関する主張でしかないうえに、そこで例示されている深い時制化は、事実の主張における現在への言及の不可欠性を主張するだけにすぎないので、少なくとも、次に示す本稿での深い時制主義の要件を満たすようなものではない。
- (42) 少なくともこの点において、特殊相対論における同

- 時性の相対性との両立可能性を容易にする図式を採っていることになる。
- (43) このような「モードとしてのコブラ」という発想は決して目新しいことではない。古く遡れば、アリストテレスの様相概念をこのように解釈する者もあるし ([Patterson 1995] p.3.)、J. S. ミルは明らかに時制に関して類似の主張を行っている ([Mill 1874] I.iv.2.)。また現代でも、C. マッギンが様相に関して「コブラ修飾子(copula modifier)としての様相」という類似の主張を行っており ([McGinn 2000] pp.74-78.)、八木沢敬はそうしたマッギンの様相概念に対して「様相的時制(modal tense)」という呼称を与えている ([Yagisawa 2010] pp.76-80.)。すなわち八木沢は、時制がコブラ修飾子であることを前提としたうえで、時制と同様の見方を様相に対しても適用したのが、マッギンの様相概念だと考えているのである。ただし、マッギンがそうした様相を還元不可能と考えているのに対し、矢木沢は何らかの特殊な様相的種類の抽象的対象と考えるべきだと主張している。本稿はもちろんマッギンに与するものである。
- (44) この主張は、「時制的属性(tensed property)」が現在存在するという J. ビゲロウなどの主張とは異なる(どころかむしろ趣旨としては対極にある)ことにも注意されたい([Bigelow 1996])。コブラを時制化することの重要な利点のひとつは、時制・指標・副詞などによる属性の修飾や属性の関係化などによって属性そのものを多様化する必要がないということにある。なお、実体的対象の非時間的側面に関する述定のモードについては、[加地 2007]において素描しておいた。
- (45) 本稿では、「truth maker」と「truth bearer」の対比を命題の真偽に中立的な形に一般化して、「真理値付与者」と「真理値受容者(truth-value bearer)」という対比を用いる。
- (46) ただし、当該の実体的対象として「宇宙」「場」などを選択することが可能であれば、結果としてグローバルな主張を行うことになる。さらに「タキオン」などの時間逆行的な粒子に対しても、それを孤立した耐続者として捉えることが可能ならば、こうした時制概念を適用できるかもしれない。またこの立場は、ひょっとすると K. ファインの言う「断片主義(fragmentalism)」に一定の親和性を持つかもしれない ([Fine 2005] ch.8.)。
- (47) ただし、これはあくまでも最もプリミティブなレベルにおける性格付けであり、より一般化することが必要だが、それについては第二部で行う。
- (48) すなわち、ここで提示されているのはあくまでもモードとしての実在性であり、耐続者の存在性格における実在性なので、少なくとも第一次的には未来命題の二値性の問題とも独立である。つまり、未来命題については二値原理が成立しないという意味での未来に関する反実在論を主張したとしても、属性の例示モードとしての未来形に対応するような耐続者が有する時間的可能性そのものの実在性は保持し得る。
- (49) [Prior 1967] pp.128-136.
- (50) 過去命題もトロープ(あるいはその欠如)を真理値付与者として持ち得るという点については説明が必要であるが、それは第二部で行う。
- (51) 複合時制も処理できるようにするためには更なる規定が必要であるが、基本的には複合時制の一部をメタ言語的に処理する手法によって対処可能だと考えている。例えば、「彼はすでに成人していた」などの過去完了形命題は、彼は<彼は成人した>という命題を真にするような耐続者であった」と解釈することによって、「耐続者であった」というひとつの単純過去形のみが「使用」されている形に変形できる。より多重的な複合時制についても再帰的手法によって対処できる。また、「(tense, t)」におけるtの具体的なあり方についても説明が必要だが、それも第二部で行う。
- (52) ヴァン・インワーゲンも同様の主張を行っている。[van Inwagen 1990] p.250.
- (53) C. D. ブロードも、時制そのものの性格付けについては本稿と異なるが、過去・未来時制について同様に決定者に訴える主張を行っている ([Broad 1938] I.35, 1.21.)。また、T. クレインは、知覚論という異なる文脈においてはあがあるが、やはり知覚の「モード」に関して類似の主張を行っている ([Crane 2009] p.489.)。
- (54) [Lowe, 1988] p.73.
- (55) [Merricks 1994] p.169f. 残りの三つの要件については第二部で扱う。
- (56) [Lowe, 1988] p.73.
- (57) ハスランガーも、延続主義者と現在主義者が端的な述定を要求する点で共通していることを指摘したうえで、それに反論している ([Haslanger 2003] pp.344-350.)。
- (58) [Sosa 1979] pp.36-38.
- (59) *Ibid.*, p.37. ソーザ自身の立場はハスランガーの SOFism に近いように思われる。
- (60) *Loc. cit.*

【参考文献】

- [Bigelow, J. 1996] Presentism and Properties, *Philosophical Perspectives*, 10, 35-52.
- [Bottani, A., Carrara, M. and Giaretta, P. (eds.) 2002] *Individuals, Essence and Identity*, Kluwer.
- [Broad, C. D. 1938] *Examination of McTaggart's Philosophy*, Vol. II., Cambridge University Press.
- [Carter, W. R. and Hestevold, H. S. 1994] On Passage and Persistence, *American Philosophical Quarterly*, 31, 269-283.
- [Crane, T. 2009] Intentionalism, in [McLaughlin *et al.* (eds.) 2009], 474-493.
- [Fine, K. 2005] *Modality and Tense: Philosophical Papers*, Oxford University Press.
- [Haslanger, S. 2003] Persistence through Time, in [Loux and Zimmerman (ed.) 2003], 315-354 (chapter 11).
- [Haslanger, S. and Kurz, R. M. 2006] *Persistence: Contemporary Readings*, The MIT Press.
- [Hincliff, M. 1996] The Puzzle of Change, *Philosophical Perspectives*, 10, 119-136.
- [Honnefelder, L., Runggaldier, L. and Schick, B. (eds.) 2009] *Unity and Time in Metaphysics*, Walter de Gruyter.
- [Johnston, M. 1987] Is There a Problem about Persistence?, *Proceedings of the Aristotelian Society*, suppl. 61, 107-135.
- [加地 大介 2005] 時制と実体, 『埼玉大学紀要 (教養学部)』, 41-1, 1-14.
- [加地 大介 2007] 種の様相の論理と形而上学, 『埼玉大学紀要 (教養学部)』, 42-2, 1-14.
- [Kurz, R. M. 2006] Introduction to *Persistence*: What's the Problem?, in [Haslanger and Kurz 2006], 3-26.
- [Lewis, D. 1988] Rearrangement of Particles: Reply to Lowe, *Analysis*, 48, 65-72.
- [Lewis, D. 2002] Tensing the Copula, *Mind*, 111, 1-13.
- [Lombard, L. 2003] The Lowe Road to the Problem of Temporary Intrinsics, *Philosophical Studies*, 112, 163-185.
- [Lowe, E. J. 1988] The Problems of Intrinsic Change: Rejoinder to Lewis, *Analysis*, 48, 72-77.
- [Lowe, E. J. 2009] Serious Endurantism and the Strong Unity of Human Persons, in [Honnefelder, *et al.* (eds.) 2009], 67-82.
- [Loux, M. J. and Zimmerman, D. W. (eds.) 2003] *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford University Press.
- [McCall, S. and Lowe, E. J. 2006] The 3D/4D Contrtroversy: A Storm in a Teacup, *Nous*, 40, 570-578.
- [McGinn, C. 2000] *Logical Properties*, Oxford University Press.
- [McLaughlin, B.P., Beckermann, A. and Walter, S. (eds.) 2009] *The Oxford Handbook of Philosophy of Mind*, Oxford University Press.
- [Merricks, T. 1994] Endurance and Indiscernibility, *Journal of Philosophy*, 91, 165-184.
- [Mill, J. S. 1874] *A System of Logic* (8th ed.), Harper & Brothers Publishers.
- [Patterson, R. 1995] *Aristotle's Modal Logic: Essence and Entailment in the Organon*, Cambridge University Press.
- [Prior, A. N. 1967] *Past, Present and Future*, Oxford University Press.
- [Sosa, E. 1979] The Status of Becoming: What is Happening Now?, *Journal of Philosophy*, 76, 26-42.
- [van Inwagen, P. 1990] Four-dimensional Objects, *Nous*, 24, 245-255.
- [van Inwagen, P. 2002] Temporal Parts and Identity across Time, in [Bottani *et al.* (eds.) 2002], 387-411.
- [Yagisawa, T. 2010] *Worlds and Individuals, Possible and Otherwise*, Oxford University Press.

※本稿は、科学基礎論学会・秋の研究例会ワークショップ「夢、時間、自己同一性の哲学」(2011 年 11 月 6 日、於日本大学)での提題内容に基づいている。当ワークショップ・オーガナイザーの水本正晴氏、提筆者の渡辺恒夫氏、三浦俊彦氏ならびにワークショップ参加者の方々にお礼申しあげる。また本研究は、平成 22～24 年度科学研究費補助金(基盤研究 C: 課題番号 22520010)の研究成果の一部である。